

大学生の非認知能力と関連する幼少期の体験の検討

奥村 咲^{*1}・池田琴恵^{*2}

*1 川口市立芝南保育所

〒333-0866 埼玉県川口市芝中田2-3-1

現 *2 至学館大学 健康科学部 こども健康・教育学科

〒474-8651 愛知県大府市横根町名高山55

(2019年5月24日受付、2019年7月11日受理)

抄録：ジェームス・ヘックマンの研究により、幼少期に非認知能力を高める重要性が注目されているが、どのような幼少期の体験が重要であるかは十分に検討されていない。本研究では、大学生188名を対象に質問紙調査を行い、非認知能力の構成要素を明らかにするとともに、幼少期の生活体験・親子関係・習い事と非認知能力との関連を明らかにすることを目的とした。まず非認知能力については、3つの能力(「やり抜く力(関心の一貫性、関心の移り変わり)」、「自制心」、「社会的スキル(問題解決、関係維持、対処開始、対処行動)」)を想定して調査し、その因子構造を確認した。次に幼少期の体験と非認知能力の相関を検討した結果、やり抜く力の関心の一貫性には自然体験・地域体験と習い事の継続年数、社会的スキルの下位尺度と地域体験・自然体験と親子関係の権利支持に相関関係がみられた。(別刷請求先：池田琴恵)

キーワード：非認知能力、生活体験、親子関係

緒言

幼少期の教育と非認知能力

近年、子どもの発達において将来に大きな影響を及ぼす要因として従来注目されていた知能指数(Intelligence Quotient: IQ)ではない、非認知能力(Noncognitive skills)が注目されている。この非認知能力が注目されるようになった背景には、2000年にノーベル経済学賞を受賞したヘックマンの研究がある。ヘックマン(2013)の研究では、幼少期における教育への投資は、経済効果が高いという報告がなされた。この非認知能力に関する研究はGiving Kids a Fair Chance(2013)にまとめられており、世界的に注目を浴びている。非認知能力についてのヘックマンの研究は、経済学からの観点で二つのプロジェクトを対象にして行われた。まず一つ目のプロジェクトは、ペリー就学前プロジェクトである。ペリー就学前プロジェクトは、1960年代にある州で低所得のアフリカ系の57世帯の子どもを対象に行われたものであり、実験では、就学前の幼児に毎日午前中の2時間半、対象児に教室で授業を受講させ、さらに週に一度教師が家庭訪問をし、90分指導をするものであった。次に二つ目のプロジェクトのアベセダリアンプロジェクトでは、低所得の家庭に生まれた平均年齢生後4.4カ月の子ども111人を対象とした。アベセダリアンプロジェクトでは、対象の

子ども達を保育園や幼稚園に入園させ、小学校に入学後の3年間は教師が家庭学習の方法を指導し、対象児が8歳になるまで継続してプログラムが行われた。この2つのプロジェクトを約40年以上に渡って追跡調査した結果、就学前教育を受けた子どもの方が受けなかった子どもよりも学力や学歴、収入が高く、また犯罪率等も低いという調査結果が示された。このことにより、幼少期への投資が、その後の人生を考えるうえで経済的な効果をもたらすことが明らかとなった。

ヘックマンの研究結果は、経済学術分野のみならず、幼児教育の世界でも注目され、先進国では教育の重点が就学後から就学前にシフトしてきている(遠藤, 2016)。特に、ヘックマンのように科学的根拠に基づいた研究が進展することにより、幼児教育の重要性が客観的に議論されるようになってきた。

日本においても非認知能力は注目され始めており、国内では、遠藤(2016)が2014年の日本学術会議におけるマスタープランにおいて、就学前の育ちが人生において大変重要であるとされつつある世界の動向の中、今後就学前の子ども達の育ちを支えるには、様々な科学的なエビデンスに基づいた研究を進めて行く必要性を示唆している。また、幼児期に育むべき力や姿勢としてOECDなどが「社会情動的スキル(非認知能力)」を提唱していることを受け篠原(2016)は、非認知能力は、今後の幼児教育におい

て意識して育成すべき能力であると述べている。しかし、非認知能力に関する研究や、ヘックマンのような科学的根拠に基づいた研究は国内ではまだほとんどみられない。そのため、非認知能力に注目した科学的根拠に基づいた研究を進め、幼児教育の重要性を明らかにしていくことは、幼児教育を進めていくうえでの課題である。

非認知能力の構成要素

もともと非認知能力は、サロヴェイとメイヤーが提唱した心の知能指数である心の知能 (Emotional Intelligence Quotient: EQ) という名前で注目を集めてきた。このEQの考え方を広めたゴールマン (1995) は非認知能力と同様に、社会で成功するためにはIQよりもEQが重要であると提言し、更にEQの基礎は生後間もない時期から始まるとしている。このEQはゴールマン (1995) によれば、①自分の本当の気持ちを自覚し尊重して、心から納得できる決断を下す能力、②衝動を自制し、不安や怒りのようなストレスのもとになる感情を制御する能力、③目標の追求に挫折した時でも楽観を捨てず、自分自身を励ます能力、④他人の気持ちを感じ取る共感能力、⑤集団の中で調和を保ち、協力し合う社会的能力の5つで構成されている。

現在注目されつつあるヘックマンの非認知能力は、EQに限らず、「意欲や長期的計画を実行する能力、他人との協働に必要な社会的・感情的制御 (ヘックマン, 2013, p.17)」と定義されている。さらに、非認知能力の構成要素について Gutman & Schoon (2013) は、自己認識 (self-perceptions)、動機 (motivation)、忍耐力 (perseverance)、自己統制 (self-control)、メタ認知方略 (metacognitive strategies)、社会的コンピテンス (social competencies)、レジリエンスとコーピング (resilience and coping)、創造性 (creativity) の9つで構成されているとした。

他にも非認知能力に関係する研究として、ダックワース (2016) の「成功を予測できる性質」として、やり抜く力 (grit) の研究知見がある。ダックワース (2016) は、やり抜く力を「非常に遠い先にあるゴールに向けて、興味を失わず、努力し続けることができる気質 (p.91)」と定義した。そして、やり抜く力を調査した結果、やり抜く力が高い人は様々な異なる状況でも成功する確率が高いことを示した。更に、才能があってもやり抜く力がないと必ずしも成功に至らないとし、成功の鍵はやり抜く力であると広く知らしめた (中室, 2015)。

また、心理学者であるミシェル (1972) のマシュマロ実験では、「自分の気持ちをコントロールする力 (自制心)」が人生を成功に導く上で重要であることが示された。マシュマロ実験は、スタンフォード大学内の保育園で、

186人の4歳児を対象として行われた。この実験は、子どもにマシュマロを一つ与え、「いつ食べてもいいが大人が部屋に戻るまで我慢出来ればマシュマロを更にもう一つ食べられる」と伝えた後、大人は退出し、15分後に戻ってくるというものであり、「マシュマロをすぐに食べた子どもと食べずに我慢した子どもでどのような差が出るのか」を調査した。この実験に参加した、子どもたちを高校生まで追跡調査した結果、マシュマロを食べずに我慢した子どもの方が自制心が高く、また、大学進学希望者対象に行われるアメリカの共通試験であるSATのスコアも高いことが明らかとなった。この実験から、学業成績と自制心の関連の高さが示されている (中室, 2015)。

これらの研究知見から、非認知能力の要素の中でも、やり抜く力と自制心は、非認知能力を検討する上で重要な要素になると考えられる。さらに、ヘックマン (2013) は非認知能力の構成要素の一つとして社会的コンピテンスを挙げており、また Gutman & Schoon (2013) は「集団の中で調和を保ち、協力し合う社会的能力」を非認知能力の構成要素に入れている。やり抜く力や自制心だけではなく、対人的能力のような外面的要素も非認知能力には、重要な要素であると考えられる。こうした対人的な能力・技能については、これまで「社会的スキル (social skill)」という視点から研究が行われてきた。社会的スキルとは、「他者との関係や相互作用の促進のために使われる技能 (塩見, 2000, p.10)」であり、特に、菊池 (2007) の作成した社会的スキル尺度「Kiss-18」は、社会的スキルを測る際に幅広く用いられている。

以上の観点から、本研究では非認知能力の構成要素のうち、諦めずに一つのことをやり遂げようとする力である「やり抜く力」、自分の気持ちをコントロールする力である「自制心」、そして、他人と共感する力、仲間と関わる力である「社会的スキル」に着目することとした。

非認知能力と幼少期の体験

現在、様々な研究知見から、非認知能力を高めることが、結果として経済的な効果をもたらすということが明らかにされつつある。しかし、ペリープロジェクトでは、貧困層という限定した対象に対してのみ、特定の教育方法による介入を行っており、非認知能力を高めるためには幼児期から児童期にかけて (以下、幼児期から児童期に該当する時期を幼少期と示す)、どのような体験が大切であるかは具体的に示されていない。このことから、実際にどのような体験を保育・教育の中で積むことが、子どもたちの非認知能力を高めるために有効なのかを明らかにすることが、実践的課題として残されている。

非認知能力に関連する幼少期の体験について先行研究を概観すると、まず様々な生活体験や自然体験をすることが重要であることが指摘されている(石坂, 2009; 鎌田, 2009)。国立青少年教育振興機構(2010)の調査では、子どもの頃の体験のうち、特に自然体験や友だちとの遊び、地域活動といった体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多いことを示している。このことから、人生における意欲に関わる非認知能力を育むうえで、子どもの頃の体験が重要であると考えられる。

また、親の養育態度について、森下(2003)は、幼児期の子どもの自己抑制について、家庭でも園でも自己抑制の高い子どもは父母共に受容的な養育態度であり、自己抑制の低い子どもは父母共に拒否的であるという結果を示している。また、戸ヶ崎・坂野(1997)は、母親の攻撃的で拒否的な養育態度が子どもは家庭での関係維持行動・関係向上行動の低さを經由して、学校での関係維持行動が低いことを示している。このように自己抑制や対人関係上の能力に親の養育態度が影響するという示唆は、子どもの非認知能力の一部にも親の養育態度が影響する可能性を示唆していると考えられる。

さらに、戸田・鶴・久米(2014)は、生徒会に所属し、かつ運動系の部活に入っている子どもは非認知能力が高いことを示している。おおた(2007)は、東大などの高学歴である人は、ピアノを習っていたという調査結果を示している。子どもの成長発達を願って、親の習い事への関心は高まっており、人生の成功に必要なと考えられている非認知能力にも影響する可能性が考えられる。

以上のことから、非認知能力には、幼少期の体験や習い事、親の養育態度が影響を及ぼすことを本研究の仮説とした。

本研究の目的

研究では、幼少期のどのような体験が非認知能力に影響を与えるのかについて質問紙調査を行い、その分析結果から非認知能力の構成要素を明らかにするとともに、幼少期の体験と非認知能力の関連性を明らかにすることを目的とする。その結果から、非認知能力に必要な幼少期の体験の関連を検討するとともに、今後の幼児教育への活用を目指す。

対象および方法

1. 研究協力者

調査協力者は、関東の4年制大学で保育系の授業を受講している1年～4年生の学生、188名(男性50名(27%)、女性138名(73%)、平均年齢20.33歳(SD=1.35))であった。

2. 質問紙

非認知能力の構成要素を検討するため「やり抜く力」、「自制心」、「社会的スキル」に着目して調査した。また、非認知能力と関連する幼少期の体験として「生活体験」、「親子関係」、「習い事」について調査した。本調査は以下の各尺度の合計90項目からなる質問紙を使用した。

- (1) やり抜く力: Duckworth(2007)が作成した「グリット・スケール」を使用した。本尺度は、関心の一貫性・関心の移り変わりの2つの下位尺度で構成され、全12項目である。質問項目の回答法は、「全くあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「少しあてはまる(4点)」、「よくあてはまる(5点)」の5件法である。
- (2) 自制心: Tangeney et al.(2004)により作成されたBrief Self-Control Scaleを基に尾崎ら(2016)が作成した「セルフコントロール尺度短縮版」を使用した。この尺度は1因子で、13項目からなる。質問の回答法は、「全くあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「少しあてはまる(4点)」、「よくあてはまる(5点)」の5件法である。
- (3) 社会的スキル: 菊池(2007)が作成した18項目からなる「Kiss-18」を使用した。本尺度(KiSS-18)はこれまで大学生の年齢層を対象とした研究で3～5因子構造と、その因子構造にばらつきがみられている。質問項目の回答法は、「全くあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「少しあてはまる(4点)」、「よくあてはまる(5点)」の5件法である。
- (4) 幼少期の生活体験: 国立青少年教育振興機構(2010)が作成した小・中学生の年代を対象として作成された「子どもの頃の体験」を使用した。本尺度は、自然体験・動植物とのかかわり・友だちとの遊び・地域活動・家事行事・家事手伝いの6つの下位尺度で構成され、全30項目である。回答方法は、「ほとんどない(1点)」、「少しある(2点)」、「何度もある(3点)」の3件法である。
- (5) 親子関係: Darling(1993)が作成した「賢明な育て方診断テスト」を使用した。本尺度は、寛容(温かい、子どもの自主性を尊重)・厳格の下位尺度で構成され、全15項目からなる。質問の回答法は、「全くあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「少しあてはまる(4点)」、「よくあてはまる(5点)」の5件法である。
- (6) 習い事: 幼少期に「1.習い事をしたことがあるか(はい、いいえ)」、「2.その習い事は何歳から何歳までしていたか」を質問事項とした。

3. 調査方法および調査期間

- (1) 調査方法：授業の時間を利用し、アンケートを実施した。調査協力者には、調査への協力は強制ではなく、個人が特定されることはないこと、結果は統計的に処理するなどを伝えた上で、本研究は幼少期の体験について調査するものであるという研究の趣旨を伝え、調査協力への同意を得た。
- (2) 調査期間：調査は、2017年11月下旬から12月上旬に実施した。

4. 分析方法

IBM SPSS Statistics-24ソフトを用い、因子分析及び相関分析を行った。

結果

本研究の目的は、幼少期のどのような体験が非認知能力に影響を与えるのかを明らかにすることである。まず、本研究で用いた調査項目の構造を確認するため、国内で因子数が確定しているものについては先行研究に基づいて因子数を確定した分析を行い、国外で作成されたものおよび国内で因子数が不安定なものについては探索的因子分析を行った。

各尺度の構造を確定したのちに、非認知能力と幼少期の体験の関連性について明らかにするために、相関分析を行った。

(1) 因子分析の結果

非認知能力および幼少期の体験についての因子分析では、国内の先行研究ですでに因子構造が確定している「自制心」については、1因子を想定して主成分分析を行った。また、国外で作成された「やり抜く力」、「親子関係」、国内で作成されているが因子分析が行われていない「幼少期の体験」、因子数が不安定である「社会的スキル」については、探索的因子分析を行った。最尤法、プロマックス回転による因子抽出を行った。因子抽出にあたっては、抽出の基準を最小固有値1以上、因子負荷量を.35以上とした。その後、下位尺度ごとに信頼性分析を行い、 α 係数を算出した。本研究の分析では、 α 係数が.70に満たないが.60以上の値をとる内的整合性のやや低い因子もみられたが、限られた調査協力者によるデータであることから既存の尺度項目をなるべく残すこととし、 α 係数が.60以上のものを採用した。

① 非認知能力の因子分析結果

まず、「やり抜く力」項目の因子分析の結果(Table 1)、第一因子に6項目、第二因子に6項目が属した。第一因子には「私は挫折をしてもめげない」や「一度始めたことは、必ずやり遂げる」といった項目が集まり得点が高いと諦めずに一つのことをやり遂げようとする力が高いことを示していると考えられる。次に、第二因子には「新しいアイデアやテーマが出てくると、ついそちらに気を取られてしまう」や「興味の対象が毎年のように変わる」といった項目が集まり、得点が高いと興味関心の移り変わりが早い

Table 1. 「やり抜く力」の因子分析結果

項目	質問	因子		共通性
		I	II	
【関心の一貫性】 $\alpha=.799$				
2	私は努力家だ。	.722	-.048	.534
3	重要な課題を克服するために、挫折を乗り越えたことがある。	.765	.104	.571
4	私は挫折をしてもめげない。	.850	.070	.709
5	私は勤勉だ。	.583	-.107	.371
10	一度始めたことは、必ずやり遂げる。	.552	-.015	.307
11	私は成し遂げるのに数年かかる目標を達成したことがある。	.427	.127	.182
【関心の移り変わり】 $\alpha=.760$				
1	新しいアイデアやテーマが出てくると、ついそちらに気を取られてしまう。	.170	.394	.163
6	目標を設定しても、すぐ別の目標に乗り換えることが多い。	-.140	.379	.180
7	達成まで数カ月もかかることに、ずっと集中して取り組むことがなかなかできない。	-.406	.409	.384
8	興味の対象が毎年のように変わる。	-.012	.829	.691
9	私は数カ月ごとに新しいことに興味を持ちやすい。	.118	.834	.678
12	アイデアやテーマに夢中になっても、すぐ興味を失ってしまったことがある。	-.003	.570	.325
		因子間相関	I	II
			I	-.157

ことを示していると考えられる。これらの因子構造は、Duckworth (2007) の研究と同様の因子構造・項目となった。そこで、Duckworth (2007) に基づき、第一因子を「関心の一貫性 ($\alpha=.799$)」、第二因子を「関心の移り変わり ($\alpha=.760$)」とした。なお、項目7は因子負荷量が第一・第二因子ともに高いが、先行研究との整合性を考慮し、尺度項目として残した。

次に、「自制心」はすでに国内の研究で一因子構造が確認されているため、主成分分析を行った。その結果、4つの成分が抽出されたため、第2成分以降に負荷量の高い項目を除いた分析を2回行い、項目5・7・8・12を削除したところで、第1主成分にまとまった。残った9項目を自制心尺度 ($\alpha=.796$) の項目として採用した (Table 2)。

社会的スキルに関する尺度は、国内の先行研究において因子数が不確定のため、本研究での下位構造を確定するため、探索的因子分析をおこなった。その結果、因子負荷量が.35に満たない項目9・12・13を削除し、再度同様の因子分析を行ったところ4因子が抽出された (Table 3)。第一因子には、「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、

それを上手に処理できますか」といった問題解決に関する5項目が集まり、得点が高いことで問題の解決に関するスキルが高いことを示していると考えられる。第二因子に

Table 2. セルフコントロール尺度短縮版の因子分析結果

項目	質問	因子	
		I	共通性
【自制心】 $\alpha=.796$			
1	悪いクセをやめられない。	.713	.509
2	だらけてしまう。	.681	.464
3	場にそぐわないことを言ってしまう。	.585	.343
4	自分にとってよくないことでも、楽しければやってしまう。	.607	.368
6	もっと自制心があればよいのと思う。	.559	.312
9	集中力がない。	.661	.436
10	先のことを考えて、計画的に行動する。(※)	-.500	.250
11	よくないことと知りつつ、やめられない時がある。	.562	.316
13	趣味や娯楽のせいで、やるべきことがそっちのけになることがある。	.730	.533
※反転項目			

Table 3. 社会的スキル (KISS-18) の因子分析結果

項目	質問	因子				共通性
		I	II	III	IV	
【問題解決スキル】 $\alpha=.763$						
6	まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	.407	.173	.282	-.004	.560
7	こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。	.771	.005	-.099	-.092	.471
8	気まづいことがあった相手と、上手に和解できますか。	.568	-.070	.046	-.011	.301
11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか。	.570	-.055	.126	.026	.396
14	あちこちから矛盾した話がつたわってきても、うまく処理できますか。	.677	-.082	-.114	.208	.464
【対人援助スキル】 $\alpha=.801$						
1	他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	-.053	.483	.406	-.185	.503
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	-.071	.948	-.098	-.043	.693
3	他人を助けることを、上手にやれますか。	-.092	.709	-.027	.330	.641
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	.262	.444	.032	.145	.552
【関係開始スキル】 $\alpha=.791$						
5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	-.047	-.089	.894	.115	.744
10	相手が話しているところに、気軽に参加できますか。	.309	.166	.495	-.264	.579
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	-.107	-.094	.773	.319	.679
【対処行動スキル】 $\alpha=.634$						
16	何か失敗したとき、すぐに謝ることができますか。	-.128	.000	.108	.503	.249
17	まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。	.210	-.041	-.033	.656	.544
18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか。	.081	.170	.100	.405	.373
		因子間相関				
		I	II	III	IV	
		I	-.	.637	.593	.444
		II		-.	.628	.402
		III			-.	.385

は、「他人を助けることを、上手にやれますか」など、対人援助に関する4項目が集まった。第三因子には「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」という3項目が集まり、関係を開始するスキルの高さを示していると考えられる。第四因子には、「何か失敗したとき、すぐに謝ることができますか」といった対処行動に関する3項目が集まった。そこで、本研究では第一因子を「問題解決スキル($\alpha=.763$)」、第二因子を「対人援助スキル($\alpha=.801$)」、第三因子を「関係開始スキル($\alpha=.791$)」、第四因子を「対処行動スキル($\alpha=.634$)」と命名した。

② 幼少期の体験の因子分析結果

幼少期の「生活体験」については先行研究において因子分析が行われていなかったため、本研究では探索的因子分析を行った。次に因子負荷量が.35に満たなかった項目8・9・10・19・23を削除し、再度同様の因子分析を行った(Table 4)。第一因子には「家の中の掃除や整頓を手伝ったことがありますか」や「洗濯をしたり干したりしたことがありますか」といった6項目が集まり、得点が高いと多くの家事手伝いを経験していると考えられる。第二因子には「海や川で泳いだことがありますか」や「米や野菜などを栽

Table 4. 子どもの頃の体験についての因子分析結果

項目	質問	因子					共通性
		I	II	III	IV	V	
【家事体験】$\alpha=.834$							
24	親戚、友人の家に一人で宿泊したことがありますか。	.425	.042	-.090	-.050	.159	.238
26	ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったことがありますか。	.612	.045	.122	-.017	-.030	.428
27	家の中の掃除や整頓を手伝ったことがありますか。	.451	.030	-.033	.486	-.079	.595
28	ごみ袋を出したり、捨てたことがありますか。	.748	.006	.003	-.033	.040	.566
29	洗濯をしたり干したりしたことがありますか。	.911	-.099	.006	-.075	.054	.736
30	食器をそろえたり、片付けをしたりしたことがありますか。	.669	.067	.055	.187	-.085	.632
【自然体験】$\alpha=.798$							
1	海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたことがありますか。	.062	.667	-.043	-.090	-.003	.419
2	海や川で泳いだことがありますか。	-.001	.508	.001	.060	.008	.292
3	太陽が昇るところや沈むところを見たことがありますか。	.000	.721	-.145	.100	-.101	.472
4	夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たことがありますか。	.018	.691	.023	-.106	.022	.457
5	湧き水や川の水を飲んだことがありますか。	-.005	.548	.023	-.039	.218	.434
6	米や野菜などを栽培したことがありますか。	-.087	.458	.243	.134	-.010	.401
7	花を育てたことがありますか。	-.044	.400	.163	.144	-.010	.301
【友達体験】$\alpha=.694$							
11	かくれんぼや缶けりをしたことがありますか。	.027	.005	.647	.028	.004	.450
12	ままごとやヒーローごっこをしたことがありますか。	.003	-.049	.833	.075	-.145	.656
13	相撲やおしくらまんじゅうをしたことがありますか。	.043	.211	.591	-.245	.048	.406
14	友人とケンカをしたことがありますか。	.007	-.256	.463	.106	.322	.393
【家族行事】$\alpha=.682$							
21	家族の誕生日を祝ったことがありますか。	-.173	-.009	-.032	.849	.115	.660
22	お墓参りをしたことがありますか。	.038	-.030	.094	.531	-.045	.324
25	家族で家の大掃除をしたことがありますか。	.201	.048	-.083	.516	-.080	.355
【地域体験】$\alpha=.664$							
15	弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたことがありますか。	.005	.074	.074	-.062	.475	.272
16	近所の小さい子どもと遊んであげたことがありますか。	.102	.050	.030	.108	.475	.383
17	近所の人に叱られたことがありますか。	-.011	-.054	-.037	.008	.557	.274
18	バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったことがありますか。	.296	.023	-.114	-.122	.468	.331
20	地域清掃に参加したことがありますか。	-.080	.082	-.017	.349	.438	.431
		因子間相関					
		I	II	III	IV	V	
		I	-.	.483	.223	.451	.500
		II		-.	.236	.434	.419
		III			1.000	.465	.407
		IV				1.000	.449

培ったことがありますか」といった7項目が集まり、得点が高いと多くの自然体験を経験していること、第三因子には「ままごとやヒーローごっこをしたことがありますか」や「友だちとケンカをしたことがありますか」といった4項目が集まり、得点が高いと友達との関わりが多いことを示していると考えられる。また、第四因子は「家族の誕生日を祝ったことがありますか」や「お墓参りをしたことがありますか」といった3項目が集まり、得点が高いと多くの家族行事に参加した経験があること、第五因子には「近所の小さい子どもと遊んであげたことがありますか」や「近所の人に叱られたことがありますか」といった5項目が集まり、得点が高いと地域との関わりが多いことを示していると考えられる。そのため本研究では、第一因子を「家事体験 ($\alpha=.834$)」、第二因子を「自然体験 ($\alpha=.798$)」、第三因子を「友達体験 ($\alpha=.694$)」、第四因子を「家族行事 ($\alpha=.682$)」、第五因子を「地域体験 ($\alpha=.664$)」と命名した。

次に、国外で作成された「親子関係」の尺度は探索的因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.35に満たない項目6・9・11・12・13・14・15を削除し、再度同様の因子分析を行ったところ2因子が抽出された (Table 5)。第一因子には「困った時は親を頼りにできる」や「親は私の悩みごとを聞いてくれない (※反転)」といった4項目が集まり得点が高いと親子間での信頼性が高いことを示していると考えられる。第二因子には「親は私のプライバシーを尊重してくれる」や「私が何をしてもよいかは、ほとんど親が決める (※反転)」といった4項目が集まり、得点が高いと親が子どもの権

利を尊重し、自由を与えており、子どもの権利の支持が高いと考えられる。そこで、第一因子を「信頼性 ($\alpha=.834$)」、第二因子を「権利支持 ($\alpha=.708$)」と命名した。

(2) 各下位尺度間の相関関係

変数間の関連を明らかにするために、非認知能力と幼少期の体験の各下位尺度間の相関分析を行った (Table 6)。また、本研究では、相関係数 (r) が土.20に満たない変数間の関係性については、有意水準が5%以下であっても十分な相関関係があるとはいえないとみなした。

まず、やり抜く力の下位尺度である「関心の一貫性」においては、「自然体験 ($r=.233, p<.01$)」・「地域体験 ($r=.240, p<.01$)」、「習い事の継続年数 ($r=.234, p<.01$)」に弱い有意な正の相関がみられた。一方、やり抜く力の下位尺度である「関心の移り変わり」では、いずれも有意な相関はみられなかった。

次に、「自制心」は、いずれも有意な相関はみられなかった。

最後に、社会的スキルの下位尺度である「問題解決スキル」では、「地域体験 ($r=.211, p<.01$)」、親子関係の「権利支持 ($r=.233, p<.01$) と」に有意な弱い正の相関がみられた。「対人援助スキル」では、「地域体験 ($r=.258, p<.01$)」のみと有意な弱い正の相関が示された。「関係開始スキル」では、「自然体験 ($r=.257, p<.01$)」・「地域体験 ($r=.380, p<.01$)」と有意な弱い正の相関がみられた。「対処行動スキル」では、いずれも有意な相関はみられなかった。

Table 5. 親子関係の因子分析結果

項目	質問	因子		共通性
		I	II	
【信頼性】$\alpha=.834$				
1	困った時は親を頼りにできる。	.839	-.069	.655
2	親は私との会話の時間を作ってくれる。	.812	-.032	.637
3	私は親と一緒に楽しいことをして過ごす。	.770	-.025	.575
4	親は私の悩みごとを聞いてくれない。(※)	.560	.228	.485
【権利支持】$\alpha=.708$				
5	私が頑張っても、親は褒めてくれない。	.275	.407	.346
7	親は、自分たちの言うことが正しく、私は文句を言わずに従うべきだと思っている。(※)	-.053	.951	.860
8	親は私のプライバシーを尊重してくれる。	.024	.502	.264
10	私が何をしてもよいかは、ほとんど親が決める。(※)	-.050	.691	.447
因子間相関		I	II	
		I	-.	.467
		II		1.000
		III		

※反転項目

Table 6. 非認知能力と幼少期の体験の各下位尺度間の相関分析結果

		やり抜く力		自制心	社会的スキル			
		関心の 一貫性	関心の移り 変わり		問題 解決	対人 援助	関係 開始	対処 行動
生活体験	自然体験	.233**	.007	-.114	.151**	.164*	.257**	.182*
	家事体験	.154*	-.017	-.069	.098	.057	.102	.033
	友達体験	.035	.136	.138	.095	.112	.152*	.176*
	家族行事	.132	-.045	-.091	.142	.046	.099	.104
	地域体験	.240**	.109	.087	.211**	.258**	.380**	.163*
親子関係	信頼性	.097	.061	-.044	.100	.159*	.153*	.142
	権利支持	.116	.038	-.147*	.233**	.166*	.147*	.199*
習い事	継続年数	.234**	-.094	-.113	.012	.051	-.010	.096

*. p<.05, **. p<.01

考察

(1) 非認知能力の構成要素

本研究では、非認知能力のうち、「やり抜く力」、「自制心」、「社会的スキル」の3側面に着目して調査を行った。本研究で因子分析を行った結果、「やり抜く力」はDuckworth (2016)と同様の因子構造、因子項目となった。「やり抜く力」の構成要素として、日本国内でも「関心の一貫性」と「関心の移り変わり」という2側面が確認されたといえよう。

「自制心」については、いくつかの項目が削除されたものの、尾崎ら(2016)の結果と同様の1因子構造が確認された。

また、「社会的スキル」については、「問題解決スキル」、「対人援助スキル」、「関係開始スキル」、「対処行動スキル」の4因子が見出された。菊池(2004)によれば、本尺度(KiSS-18)はこれまで大学生の年齢層を対象とした研究で3~5因子構造と、その因子構造にばらつきがみられる。本研究では、いずれの先行研究(例えば、松島, 1999; 津村, 2002)とも異なる因子構造となった。菊池(1993)の研究から約25年が経過しており、対人関係のあり方も変化してきている。このような中で、社会的スキルは各世代の社会状況や対人関係構造によって、その認知構造が影響を受ける可能性もあると考えられる。

(2) 非認知能力と幼少期の体験の関連

本研究においては、幼少期の体験と非認知能力の関連性を検証するため、相関係数を算出した。以下、非認知能力の3つの側面と幼少期の体験との関連について検討する。

① 「やり抜く力」と関連する幼少期の体験について

やり抜く力と幼少期の体験の相関分析の結果、やり抜く力の下位尺度である「関心の一貫性」においては、「自然体験」・「地域体験」および「習い事の継続年数」に有意な正の

相関がみられた。「関心の一貫性」は挫折への強さや努力に関わる変数であり、「関心の一貫性」で高い得点となった人は、幼少期に自然体験や地域体験を多くしたとされており、習い事を長く継続していることを示している。

一方、「関心の移り変わり」では、いずれの変数とも有意な関連が示されなかった。「関心の移り変わり」の得点の高さは自身の関心が高まることや、興味関心の向く方向が変わりやすいことを示しているが、この関心の移ろいやすさは、本研究で扱った体験活動および親の養育態度が関連するものではないことが示された。このことから「関心の移り変わり」といった力が、生育環境や体験に影響されるのではなく、生得的な力である可能性も考えられよう。

以上のように、「やり抜く力」において、「関心の一貫性」は自然体験と地域体験、習い事の継続年数と関連するのに対して、「関心の移り変わり」は幼少期の体験と関連がみられないことが示された。幼少期の生活体験は、やる気や生きがいに影響を及ぼすことが示されており(国立青少年教育振興機構, 2010)、本研究で「関心の一貫性」として扱った目標を達成するための一貫した努力や挫折への強さが、幼少期の経験によって育てられる可能性も考えられる。

また、習い事に関する先行研究としてダックワース(2016)は、2年以上課外活動を続けている子どもは、やり抜く力が高いという結果が示している。また、戸田・鶴・久米(2014)は、生徒会に所属し、かつ運動系の部活に入っている子どもは非認知能力が高いことを示している。しかし、本研究では運動系の習い事の有無だけでは非認知能力との関連は見られず、継続して習い事をしていること、つまり継続年数との関連のみが見出された。また本研究の結果は相関分析の結果であり、幼少期から継続して習い事をすれば単純に非認知能力が高まるものではなく、「関心の一貫性」がもともと高い子どもが習い事を継続できている可能

性も考えられる。今後、因果関係の分析を進めていくことが必要である。

一方、親子関係はやり抜く力の2側面のいずれとも有意な相関関係は見出されなかった。ダーリング(1993)の「賢明な育て方(本研究における親子関係)」における研究では、やり抜く力のうち「関心の一貫性」との相関がみられていたが、本研究においては、親子関係と非認知能力には関連があるとは言えないという結果が示された。ダーリング(1993)が指摘する子育てにおける文化的な意識の違いが影響している可能性もあるが、やり抜く力が後天的に家庭で育成されるものではない可能性も考えられる。

②「自制心」と関連する幼少期の体験について

「自制心」と幼少期の体験の相関分析では、いずれの変数とも有意な相関は示されなかった。これは、大学生の自制心が幼少期の生活体験や親子体験と関連がないことを示している。自制心と親子関係の関連については、森下(2003)が、父母共に受容的な養育態度である場合には自己抑制が高くなるという結果を示しているが、本研究で扱った自制心との関連はみられず不一致が生じた。この原因として、一つには森下(2003)の対象者は幼児であったのに対し、本研究では大学生を対象としたことにあると考える。幼児期には親の養育態度の影響が大きくとも、大学生になるまでには自我発達とともに親の養育態度の影響は薄くなる可能性が考えられる。

③社会的スキルと幼少期の体験性について

ヘックマン(2013)やGutman & Schoon(2013)が非認知能力の要素の一つとして挙げている社会的スキルは、「問題解決スキル」では、生活体験の「地域体験」、親子関係の「権利支持」と有意な正の相関が示された。「対人援助スキル」では、「地域体験」と有意な相関関係がみられ、「関係開始スキル」では、「自然体験」・「地域体験」と正の相関がみられた。「対処行動スキル」では、いずれも有意な正の相関はみられなかった。

国立青少年振興機構(2011)は、幼少期の体験は世代が上がるほど規範意識・人間関係能力に影響を与えるという結果を示している。家事体験や家族行事、友達体験は社会的スキルと関連しないものの、自然体験と地域体験は社会的スキルの高さに関連する要因である可能性が示された。

また、親子関係のうち「権利支持」が、社会的スキルの「問題解決スキル」と相関が示された。親の養育態度と子どもの社会的スキルとの関連に関する研究には、その知見に不一致が生じている。例えば戸ヶ崎・坂野(1997)は、母親の養育態度が拒否的である場合、子どもの学校での関係維持行動が低くなることを示している。一方で、親の養育態度は子どもの社会的スキルに影響しないという結果も

示されている(能野・飯田ら, 2006)。これは養育態度のどの側面を取り扱うかによってこれらの結果の相違が生じているとも考えられる。本研究では、対人援助や関係開始、対処行動との関連はみられなかったが、親が子どもの権利を認め支持する養育態度である場合と問題解決スキルとの関連が認められた。

さらに、青木・竹嶋ら(2007)は、小学生では親の養育態度(拒否的・過保護)は限定的であるのに対し、中学生では異性の親の影響を受けることを示している。本研究の結果は、大学生を対象としており、大学生までも親の養育態度が社会的スキルと関連する可能性を示したといえよう。

今後の課題

本研究では、調査対象者が保育系授業を受講する学生であり、また、女性と男性の比率にも偏りがあるため、大学生の代表的な対象者を選定したとは言い難い。特に幼少期の体験は社会的なジェンダーステレオタイプに影響を受ける可能性もあり、今後調査対象者を増やして性差を検討する必要があると考えられる。

また、一時点での調査であったため、過去の事象である幼少期の体験とは相関関係を検討するにとどめた。そのため本研究の結果は、非認知能力の高低によって子どもが幼少期にどのような体験をしやすいか、子どもと親との相互作用の中で自由な選択ができるような関係性を築いていった可能性もあり、幼少期の体験が非認知能力とどのような因果関係にあるのかを詳細に検証するには至らなかったことが課題である。今後、幼少期からの縦断的な研究も必要であろう。

さらに、本研究では調査対象が大学生であったため、ヘックマンのように社会経済的指標との関連は調査できていない。本研究で作成された非認知能力の尺度が、社会経済的な状況を予測するものであるかを検証する必要がある。

結論

本研究では、非認知能力の構成要素として、「やり抜く力」が「関心の一貫性・関心の移り変わり」の2因子、「自制心」が1因子、「社会的スキル」が、「問題解決スキル・対人援助スキル・関係開始スキル・対処行動スキル」の4因子から構成されることを確認した。

非認知能力と幼少期の体験との関連について相関分析を行った結果、「やり抜く力」では、自然体験と地域体験、習い事の継続年数が関心の一貫性と関連するのに対して、関心の移り変わりにはいずれの幼少期の体験も関連がみられないことが示された。

「自制心」と幼少期の体験の相関分析では、いずれの幼少期の体験とも関連がないことが示された。

「社会的スキル」においては、自然体験と地域体験が社会的スキルの高さに関連する要因である可能性が示された。また、親子関係のうち「権利支持」が問題解決スキルとの関連があることが示された。

以上の結果から、特に幼少期の体験の中でも「地域体験」や「自然体験」が大学生になってからの「非認知能力」の各側面と関連する可能性が示された。関心の移り変わりや自制心においてはいずれの体験も関連がみられなかったことから、子どもが生まれ持った非認知能力が体験を選択する可能性はあるものの、幼児教育においても自然体験と地域体験という生活体験を豊かにするカリキュラムを編成することが必要であると考えられる。

また、親子関係では権利支持のみが大学生になった時点での非認知能力の問題解決スキルと関連していることが明らかとなった。保育者による家庭支援では、保護者が子どもを信頼し、自由に選択できる機会を与えられるような保護者援助を行うことも求められよう。

文献

- 青木多寿子・竹嶋飛鳥・戸田真弓・谷口弘一(2007): 両親の養育態度, 生活体験が小学生の社会的スキル, 生活充実感に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科紀要 **56**, 21-28.
- Duckworth, A.L., Peterson, C., Matthews, M.D. & Kelly, D.R. (2007): Grit: Perseverance and Passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology* **92**(6), 1087-1101.
- ダックワース(2016): やり抜く力ー人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身に付ける. ダイヤモンド社, 東京.
- Goleman, D. (1995): *Emotional Intelligence*. (ダニエル・ゴールマン, 土屋京子(訳)(1996). *EQ-こころの知能指数*. 講談社, 東京.)
- 石坂孝喜(2009): 保育所での乳幼児の生活体験と自立ー日常生活体験の保育プログラム化にむけて. *生活体験学習研究* **9**, 23-30.
- 鎌田多恵子(2009): 幼児教育における環境教育の重要性: 附属幼稚園でのとりくみから. 盛岡大学短期大学部紀要 **19**, 27-31.
- 菊池章夫(2007): 社会的スキルを測る. 川島書店, 埼玉.
- 菊池章夫(2004): *KiSS-18* 研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要 **6**, 41-51.
- 国立青少年教育振興機構(2010): 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書(平成22年度調査). http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/84/ (2017年11月8日検索)
- ヘックマン, J.J. (2013): 幼児教育の経済学. 東洋経済新報社, 東京. (Heckman, J.J.: *Giving Kids a Fair Chance*. The MIT Press, MA.)
- 松島るみ(1999): シャイネスが自己開示に及ぼす影響ー社会的スキルを媒介としてー. *教育心理学会第41回総会発表論文集*, 357.
- 森下正康(2003): 幼児の自己制御機能の発達研究. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 **13**, 47-56.
- 中室牧子(2015): 「学力」の経済学. ディスカヴァー・トゥエンティワン, 東京.
- 能野淳子・飯田 綾・野崎健太郎・三輪温子・高橋 史・嶋田洋徳(2006): 親の養育態度と子どもの社会的スキルおよび抑うつとの関連. *日本心理学会第70回大会研究発表論文集*, 2AM046.
- おおたとしまさ(2017): 習い事狂騒曲. ポプラ社, 東京.
- 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤岳(2016): セルフコントロール尺度短縮版の翻訳および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究* **87**, 114-154.
- 塩見邦雄(2000): 社会性の心理学. ナカニシヤ出版, 京都.
- Tangney, J. P., Baumeister, R. F., & Boone, A. L. (2004): High self-control predicts good adjustment, less pathology, better grades, and interpersonal success. *Journal of Personality*, **72**, 271-324.
- 戸田淳仁・鶴光太郎・久米功一(2014): 幼少期の家庭環境, 非認知能力が学歴, 雇用形態, 賃金に与える影響. *RIETI Discussion Paper Series*, 14-J-019. <https://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/14j019.pdf> (平成30年4月4日)
- 戸ヶ崎康子・坂野雄二(1997): 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響. *教育心理学研究* **45**, 173-182.
- 津村俊充(2002): ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす影響ー社会的スキル尺度 *KiSS-18* を手がかりにしてー. *アカデミア(人文・社会科学編)* **74**, 291-320.

The association of Childhood Experience with College Students' Non-cognitive Skills

Saki OKUMURA^{*1} and Kotoe IKEDA^{*2}

^{*1} Shibaminami Nursury,
3905 Shiba, Kawaguchi, Saitama 333-0866, Japan

^{*2} Shigakkan University,
55 Nadakayama, Yokonechou, Obu, Aichi 474-8651, Japan

Abstract : Since James Heckman has reported his investigation, much attention has been paid to the importance in enhancing the non-cognitive skills in childhood. However, little research has been conducted to clarify what kind of childhood experiences have a greater effect on acquiring the non-cognitive skills. This research, therefore, aimed to investigate how childhood experiences, including the life experiences, parent-child relationship, and the private learning experiences, affect the college students' levels of non-cognitive skills, as well as the psychological constructs and the factor structure of the non-cognitive skills. An anonymous survey questionnaire survey was conducted to 188 4-year college students. The results of the factor analysis indicated that the non-cognitive skills consisted of the following four factors; (a) the ability to accomplish the tasks (consistency and transition of interests), (b) the ability of self-control, and (c) the social skills (problem solving, helping others, starting interpersonal relationship, and coping behavior). It was also found that the nature experiences and the community experiences in childhood, and the years of private learning experiences were positively correlated to the consistency of interests. The nature experience and the community experience also positively correlated to the social skills, as well as acceptance of child's rights was positively correlated to the problem solving skills. (Reprint request should be sent to Kotoe Ikeda)

Key words : Non-cognitive skills, Life experiences, Parent-child relationship

